

港区立郷土歴史館

歴史館だより

企画展「江戸の本 一本からひとく人びとの営み」より

おうらいもの ちょうほうき
往来物と重宝記 ー生活の参考書ー

石田 七奈子

(学芸員)

江戸時代以前まで、本の出版は多くの資金や時間を必要とするため権力者のもとで行われ、本は庶民の手が届かないものでした。しかし江戸時代初期に出版を担う民間の本屋が登場すると、次第に庶民向けの本も販売されます。港区域でも芝神明町（現在の芝大門一丁目）などに学問的な本を取り扱う書物問屋や娯楽目的の本を取り扱う地本問屋ができました。

庶民向けの本で人気があったジャンルの一つが往来物や重宝記といった本でした。往来物は往信と返信の往来する手紙の文例集であることからこの名が付いた本で、手紙の文面を通じて文字や文章を学ぶ教科書の役割も果たしました。重宝記は日常生活の参考書で、何かを便利だと思って使うことを「重宝する」と言うように、役に立つ情報や知識を集めたものでした。当館蔵の「女乃紙面（女中重宝記）」は、そんな往来物と重宝記を1冊にした本です。刊記がなく刊行年や出版元は不明ですが、文化13（1816）年に同内容の本を芝神明町などの書物問屋が出版しています。

「女乃紙面」の前半には、季節の挨拶や冠婚葬祭、借用の依頼などの手紙の文例があります。例えば、「髪置の文」は、幼児が頭髪を剃るのを止め、髪を伸ばし始める家へ送った手紙です。髪置は平安時代末期から行われていた儀礼で、江戸時代には、公家は二歳、武家や民間では三歳の11月15日に行うことが多く、今の七五三につながるお祝いです。写真1の右の幼児のように頭頂部を残して髪を剃っていたのを、左の子どものように髪を結ぶために伸ばし始めました。



写真1 髪を剃った幼児と結った子ども（当館蔵『東都歳事記』より）

文例にはお祝いの言葉とともに、「白髪」と「末広」を贈る事も記されています。「白髪」は白髪に見立て

た麻糸のことで、白髪になるまでという長寿の願いを、「末広」は紙張りの扇で、下部（末）が広がっていることから末まで栄えるようにとの願いを込めた縁起物です。このように文例は、文章や文字の書き方の手本となるだけでなく、相応しい贈答品など社会生活に必要な知識の参考にもなりました。

一方、後半には、衣類に付いた油や酒の落とし方、髪を生え際や肌のきめの整え方、既婚女性が染めるお歯黒の色が薄い時の対処法などが記されています。対処法は経験に基づく生活の知恵で、油を落とすために熱した米のとぎ汁を使う、きめを整えるために肌に卵白を塗るなど、効果や安全性は不明ながら、現在も見聞きするような方法も含まれています。

また、中には俗信的なものもあります。例えば、悪夢を見た時は「みし夢をはくのえじきとなすからに心をはれしあけほののそら（見た夢をぼく獺のエサにしたから、心は夜明けの空のように晴れる）」と三回読み上げると悪夢を払うと記されています（写真2）。獺は中国で邪を避けるものとされ、それが伝わった日本では悪夢を取り除くと信じられていました。

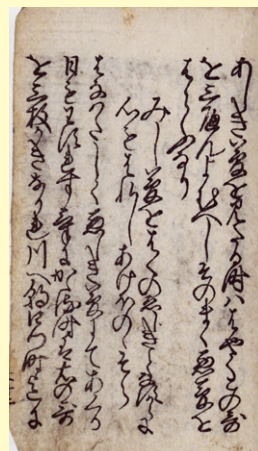


写真2 悪夢を消す方法（当館蔵『女乃紙面（女中重宝記）』より）

この本から、江戸時代に生きた女性たちの生活や関心を寄せていた物事的一端をうかがい知ることができます。髪置やお歯黒といった現在では廃れた風習もありますが、服に付いた油や肌のきめ、悪夢といった現在と変わらない悩みもあったようです。

本資料は令和6（2024）年4月27日から開催する企画展「江戸の本 一本からひとく人びとの営み」で展示します。江戸時代に生きた人びとが読み、記した江戸の本を通じて、当時の人びとの営みに思いをはせてはいかがでしょうか。



港区立郷土歴史館

歴史館だより

土留め遺構が語ること ―高輪築堤と東海道―

鈴木 美和
(芸芸員)

慶 長8 (1603) 年、征夷大將軍となった徳川家康は、江戸に幕府を開き、政治の中心が京都から江戸に移りました。政治の中心が移ると、人やモノが次第に集まり、物流網が作られ、町が発展していきます。

物流を支え、人々が安定した生活を送るためには、基盤（インフラ）整備が必要不可欠です。江戸時代にもさまざまなインフラが整備されますが、朝廷のある京都と、幕府のある江戸を結ぶ東海道の整備もその一つです。明治時代に入ると、この東海道を引き継ぐ形で道路が整備されますが、港区内では現在の国道15号（第一京浜国道）がこれにあたります。

令和3 (2021) 年7月～翌年5月、港区教育委員会が高輪大木戸跡の近く（図1）で発掘調査を実施したところ、国道15号と並行する木製の土留め遺構（土留め①）を確認しました（写真1）。

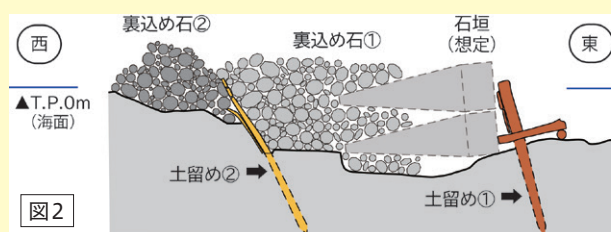


土留め①は、太い杭を南北方向に打ち、その背面に板を据えて土を押さえる構造です。杭の前には丸太を平行に据え、その上から板の下端に向けて、短い丸太を打ち込んでいます。どの木材も比較的良好な状態で残っていました。この土留めの東側からは、主に19世紀末期以降のガラス瓶等が出土しているので、この土留めが作られたのはそれ以前であると言えます。



土留め①からさらに西へ調査を進めると、新たな土留め列（土留め②）が確認されました。遺構の構造と方向は土留め①によく似ていますが、杭は細く、かなり劣化が進んでいました。土留め①と土留め②の間からは、17世紀後半頃の遺物が出土しているので、土留め②が作られた時期はそれ以前だと言えます。また、両方の土留めの背面から、石垣の裏込めと考えられる土丹（泥などが固まった軟質の岩）を確認しました。

これまでの情報を基に、横から見た模式図を作成しました（図2）。まず、17世紀中頃に、裏込め石②の前面に土留め②が作られた後、裏込め石①を伴う石垣が作られます。しかし、後世に石垣が取り去られ、その代わりに土留め①が作られたようです。



では、この石垣は、いつ取り去られてしまったのでしょうか。『鉄道寮事務簿』には、高輪海岸沿いの石垣を取り外して高輪築堤の工事に使ってしまったため、東海道の路肩が崩れて通行が困難になったので修理をしてほしい、という申し出が、明治5 (1872) 年5月に東京府からあり、それを受けて鉄道寮が修築工事をしたことや、工事にあたり、道路の下部を板柵によって土留めをしたこと、同年10月に東京府に引き渡したことが書かれています。土留め①は、この修築工事の際に作られたものである可能性が高いと言えます。

一方の土留め②も、土留め①と並行関係にあることから、東海道に関連する遺構とみなすことができます。高輪海岸を描いた浮世絵からは、海岸に沿って石垣が築かれている様子が読み取れますが、今後の調査で、東海道の位置や構造、修繕の変遷など、さらに詳しい状況が明らかになっていくことが期待されます。

参考文献 「高輪ヨリ品川迄土留板柵修理ノ義」『鉄道寮事務簿』巻4（日本国有鉄道編『日本国有鉄道百年史』第2巻 成山堂書店 1997年復刻版 所収）
港区役所編『港区史 下巻』1960年